

労働と社会発展の関係

阿部 矢 二

- 一 労働が人間をつくった
- 二 生産と歴史は逆転しない
- 三 資本主義の歴史的役割

一 労働が人間をつくった

生物としての人間にとっては、その種の生存を続けることが一番大事である。人間は、そのために先ず食べる、着る、住むための努力をしなければならぬ。だから、衣、食、住の生産と消費——物質的生活——が人間の他の一切の活動に優先し、かつ、生活の本源であり基礎であることは明らかである。それゆえ、人間の創生と進化とは、その物質的生活の再生産方法——労働の仕方、生活物資の生産方法——の創造と発展の過程に正確に照応するのである。

人間は労働しないでは生きてきなかつたし、また、他の動物と截然区別された本来の人間となることもできなかつた。人間が人間たりえたのは労働のおかげであり、労働が人間を創造したのである。労働は本来それがなくては生きてゆけない衣、食、住に関する必要を満たすために追られて行われたものであるが、生産力が高度に発展

して直接の生活資料を得るためには比較的少量の労働で足りるようになった現在でも結局その点にかわりはない。「労働は、諸使用価値の産みの母としては、有、用、的、勞、働としては、人間の、すべての社会形態から独立的な一「実存条件であり、人間と自然との間の質料交換を、かくして人間の生活を、媒介するための永久的な自然的必然である。」

労働はなお、つねに、自然と人間との間の闘争としては、困難と苦痛を伴うものでもある。この困難と苦痛とに対しては、それを軽減しようとする工夫と努力が必然におこってくる。だから、労働は人間生活の永久的条件であるという必然性と、労働の困難を克服しようとする人間の努力との相互関係において、あるいは簡単に、自然と人間との闘争過程において、労働そのもののうちに、労働生産性向上の動因をもつのである。

生きたること、すなわち働らくことであるという人間生活上の仮借なき必要が、労働を軽減する方法——生産用具の発明改良——を絶えず促がす。労働の軽減に対するねがいは、生活上に対する人間の志向だが、これが原動力となつて生産用具の改良とか労働方法の改善とか、要するに、労働生産性の発展が不断に続けられるのである。生産⇕労働の必要と反復とが、生産⇕労働の実践そのものが、生産力発展の物質的、論理的契機をもっているのである。

それゆえに人間の「物質的生活再生産」の過程は「拡大的」自己運動であり、人間生活の歴史は向上的「前進的」である。

人間の行う生産は、それが他の動物と区別される人間としての生産であつた場合は、初めから道具をつかつて行われた。生産用具の使用は人間特有の労働過程の特徴である。

「労働過程は、苟もそれがほんの幾らかでも発展しているならば、すでに加工された労働手段を必要とする。極めて古い人穴においても、吾々は石の道具や石の武器を見出す。……労働手段の使用および創造は、萌芽状態ですでに或る種の動物の属性をなしているとはいえ、独自の・人間的な労働過程を性格づけらるものであり、従ってまたフランクリンは、人間を“*a toolmaking animal*”すなわち道具を作る動物だと定義している。」²¹⁾

生産用具を使って人間は外界の自然に働きかけた。初めの生産用具は自然のうちに見出される樹枝や石塊などであつたろうが、それらのものでも手に持ち添えて草根を掘り果実を落すなどの場合は、肉体的に限られた手の物理的な力量を増加し、獲られるべき効果をより容易にあげさせるであろう。なお、こんな簡単な道具でも、繰り返して繰り返し使っているうちに、使用方法についての熟練がおのずから手についてくる。労働の経験と熟練が累積されると、次ぎにはより有効な道具の選択に進むが、自然のうちでは適当な形態で、道具として使えるものが見当らないとなると、特定の目的に適合するよう自然の素材に加工し、ついに、道具 \parallel 生産用具を造出するにいたる。石を割り、磨き、木の柄をつけたりした石器を、人間が獲得する。石器を獲得すると同時に、人間はあらゆるほかの動物から区別される「人間」そのものを自身で獲得したのである。

生産用具の獲得とその後に続くその改良、発明は、すべて人間の生活実践 \parallel 労働 \parallel 生産のうちから産み出された²²⁾。

「彼は自然質料を彼自身の生活のために使用されうる形態で取得するために、彼の身体に属する自然力たる腕や脚や頭や手を運動させる。彼は、この運動により彼の外部の自然に働きかけ且つこれを変化させることによつて、同時に彼自身の自然を変化させる。彼は、彼自身の自然のうちに眠っている諸力を発展させ、且つ、それ

らの諸力の働きを彼自身の統制のもとにおくのである。」

人間の知能の發達と生産用具の發達とは、人間の物質的・生活再生産のための労働によってもたらされる。労働は生活とともに永久に反復されねばならないという事実のうちに、労働生産性發展の要因を含む。労働の経験と熟練との累積、その後継世代による継承と一層の發展とは、生産力の限りなき發展、人類、社会の絶えざる進歩を促す原因である。

「人間の新しい世代は、いずれも、その先行する世代から、かれらによってつくりだされた生産力をうけつぐ。過去からうけつがれたこれら生産力は、生産のより以上の發展の、生産力と生産關係とのいっそうの發展の出发点である。」

労働をもって自然に働らきかけている何万何千年かの生活の繰返のうちに、人間はその身体——四肢と感官——をもって絶えず自然に接触して次第に経験を積みかさね、自然のうちに存する内部關係を認識するようになった。この自然に対する認識が、広く、深く、正しくなるに従って、人間は自然法則の必然を自己の自由な意思に奉仕させることができるようになる。自然を人間の感官が把えて意識が生じる。だから、労働の過程は意識の、従って、人間の、成長發達の過程である。労働しつゝ意識を高かめ、高かまつた意識で生産用具を改良しつゝさらに意識をたかめる「労働は労働そのものうちに發展の契機をもつ」。労働が生産用具をつくり、人間そのものをつくる。この關係は生産用具の發達段階——つまり物質的・生産諸力の發展段階の主要な指標としての——と人間と社会との生活における發展段階との照応を証明する。人類社会の歴史は、何よりもまず、物質財貨の生産様式の変遷の歴史である。

「遺骨の構造が滅亡した動物種属の身体組織の認識に対して有すると同じ重要さを、労働手段の遺物は滅亡せる経済的諸社会構造の価値判断に対して有する。」¹⁰⁾

例えば、石器の素材さは原始社会の生産力のごく低い水準を示すと同時に、この石器を使っていた人々の技術、知能のごく低い未発達の状態を示すものである。生産用具 \parallel 石器に照応する原始、未開人がある。又、近代の精巧な機械 \parallel 生産用具に対しては、それを使いこなせるだけの経験、熟練、技術、知能を備えた労働者の存在が照応する。原始人に機械の操縦ができないと同様、近代人を石器で働らかせることはできない。生産用具は、それぞれの段階における人間の獲得したすべての能力が、そのうちに凝結されているものと見られる。それゆえ、生産用具を造った人間は、それを用いて自然を変えつつ、同時に人間をつくり、かつ、変えつつある。人間は数千年の間に石器を機械に造り変えたが、その同じ過程は人間を原始人から原子を自由にする現代人に造り変えたのである。生産用具の発達に照応して、人間が、社会が発展してきた。

労働が人間の根本的な生活方法であり、労働は労働そのもののうちに労働生産性のあらゆる発展的契機を包含するゆえに、社会は向上し進歩する運動を不断に続ける。労働 \parallel 生産のうちに含まれる発展的諸契機の内部関係の研究の成果は、社会の経済的運動法則として科学的に定立されている。それゆえ、人間生活乃至社会現象に関する研究は、その基礎において労働 \parallel 生産に関する研究の科学的成果にたよらざるをえないのである。人間、社会の発展史は労働 \parallel 生産の発展史として科学であり、生産過程の基本的な力、働らく人民の歴史として前進的である。

以上述べてきたところを要約すれば、人間の物質的生活の生産が人間と社会の発生、発展の本源の起動力であ

り、生産∥労働の發達段階に照応して、それぞれ異なる人間と社会体制がうまれるということ。そして社会發展の起動力としての生産∥労働は、それ自身のうちに無限に向上發展する動因をもつゆえに、人類は恒に前に向つてその歴史の道を拓いてきたし、また将来においてもそうするであろうということである。

社会の發展に対する右のような考え方は、結局、物質が本源的なものであり、觀念的なものは物質を反映し模写したもので、派生的なものともみる唯物論にその基礎をもつものである。すなわち「思惟および意識は、人間の腦髓の産物である。人間そのものはその環境のうちで、且つその環境とともに、發展した自然の一産物である。」という考え方は「人間の意識は、それに先行する自然史の全發展の結果として最初にあらわれた」とする人類進化の事實に依拠する唯物論の根本テーゼである。この考え方をもちとして「生産の發生は、動物界から人間社会への自然の發展における最大の質的転換、すなわち移行を意味した」とか「幾千年にわたる労働のおかげで、人間の二つの主要な自然機關、すなわち手と頭腦とが、世代から世代へと前進的に變化した。」⁶⁾ というような生産を中心にした人間と社会とに関する發展史の科学の見方が可能になるのである。

唯物論の社会への適用——史的唯物論が、マルクスによつて「経済学批判」のうちで次ぎのような定式化されていることは人の知るところである。

「物質的生活の生産様式は、社会的、政治的、精神的な生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなくて、逆に、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。」⁷⁾

二 生産と歴史は逆転しない

人々は生産するにあたっては、恒に集団、社会、のうちで人々相互に一定の関係を結んだ。生産が孤立的でなく社会的であったことからして、人間は本来社会的動物だといわれる。人々は労働の過程で共同し、協力することによって一定の結合関係にはいる。生産における人々の関係は、主として人々と生産手段の所有関係を基礎として規定される。そして生産手段の所有形態の如何によって、その社会の経済的構造が、従つてその階級関係が、それぞれ特定の性格をもつものとなる。生産手段の所有は、生産における人々の協力結合の関係を規定するところの社会関係であり、生産力はかかる社会関係——生産関係——のもとで、それとの交互作用によって、社会の生産を遂行する。

「生産の社会的形態がどうであろうとも、労働者と生産手段とは依然として常に生産の要因である。だが前者も後者も、それらが相互に分離された状態にあっては、ただ可能性から見てそうであるにすぎない。總じて生産が行われるためには、それらが結合されねばならぬ。この結合が成就される仕方様式の特殊性によって、社会構造上の種々なる経済的時代が区別される。」¹⁰⁾

資本主義社会における生産手段と労働者との結合の仕方様式は、労働力の商品化を通じて成就されるという点にその特殊性が現われる。資本家階級は生産手段を独占的に私有しているが、労働者を私有していない。それと彼らは生産手段の所有から切りはなされ、自己の労働を対象化することのできない労働者から労働力を買入れ、自己の所有する生産手段と結びつけ、社会的生産を私的営利的に経営する。生産手段と生活手段の資本家階級に

よる所有が、労働者階級の資本家階級への隷属の物質的基礎であり、この基礎の上での労働力の売買は資本家階級に剰余価値取の可能性を与える、所有が取得に転化する。このようにして、生産手段の所有関係——生産関係——が社会の階級関係、隷属関係、搾取関係を規定するのである。総じて階級社会にあっては、支配と隷属、搾取と被搾取の特殊な様式が、それぞれの社会を性格づけるものだから、直接生産者と生産手段との結合の仕方の特異性が基準になって社会発展の各段階が劃されるのである。

資本主義社会の成立の成立以来、社会的生産力はその先行社会——封建社会——のその水準を何千、何万倍というほど超過して高かまった。何故生産力がそれほど飛躍的に発展したかといえ、旧い封建的生産関係の極端から解放された生産力が、新しいより進歩的な資本主義的生産関係を与えられ、生産関係との新たな調和ができたからである。「生産力と生産関係との関係は、生産の内容と社会的形態との関係として特徴づけることができる。生産関係の与えられた形態は、一定の内容によって——すなわちそれに照応する生産力の水準によって——うみだされる。」¹¹⁾

封建社会の生産関係のもとで生産力は伸びられるだけ伸びた、だが生産力の発展はその段階で了ってしまいう性質のものでないから、さらになお伸びようとする。その時封建的生産関係は生産力を護り、育てるところの積極性を失って、その反対物——生産力発展の障碍物——に転化する。生産力の発展性、進歩性に対する、生産関係のこの不適応化による反動性は、自己の必滅を証するものである。このような発展水準に達した生産力は、それに照応する形態——生産関係——を要求する。かくて、資本による商品生産の自由を拘束、制限する一切の封建秩序は破棄され「資本」の自由と平等を「人民」の自由と平等として掲げた資本主義秩序がこれにかわった。すな

わち「それに照応する生産力の水準によって」うみだされた形態、それが資本主義的生産関係なのである。生産関係の変革を規定する起動力が、特定水準に達した具体的な生産力であるということによって、変革されたあとにうみだされる生産関係の性格もまた或る特定のものに規定される。生産力と生産関係の統一としての生産様式を支配する諸法則は、経済学によって厳密な科学性を与えられている。それで、生産様式の發展段階に照応した一定の社会体制の運動は、その土台——生産様式——の運動から説明されなければならないのが当然である。それゆえ、社会の変革とその歴史は、社会の経済的構造の發展、変革の、運動の、法則によって把握される場合のみ、その必然性、合理性を得ることができるのである。一定の経済的構造をもった社会は生産力の發展の結果、必然に、より、高級の経済的構造をもった他の一定の社会によって前進的におきかえられる。

一般に内容と形態とは、もの、の定在となつて不可分に統一されるものであるが、生産の場合にあつてもその通りであつて、社会の生産は一面では生産力として、他面では生産関係として現われ、その結合統一によつて生産が行われる。しかしながら、生産力は、生産用具とそれを十分使いこなす経験と熟練を体得した人間との結合によつて形成されるところの生きた力なのだから、その本質上極めて流動的であり、向上線に沿つて拡大しようとするものである。これに対して生産力が發動する社会的形態、財貨の生産において人々の社会的結合を規定する生産関係は、それが特に生産手段の所有を枢軸とするものであるがゆえに、一定の規範、秩序の維持を本来の使命とするものであり、固定化への傾向をもつ。兩者の間のこの根本的矛盾が、恒に、生産力の發展による生産関係の揚棄となつて解決されるところに、社会の恒常的發展進歩の原因が存するのである。

物質の存在のしかたは「運動」であるという一般の命題は、殊に人間の生命力が中心となつている生産力の場

合に適切である。労働の生産力は生成発展以外に存在の方法を知らない。絶えず新たなものを生みつつ自らの力を増強する。これが生産力の存在の仕方である。だから或る発展水準の生産力に適應していた生産関係は、生産力の他のより、高い発展水準にもう適應しないものになる。

「社会の物質的生産力は一定の發展段階にたつすると、その生産力がこれまでその内部で發達してきた現存の生産関係、またはその法律的表現にすぎない所有関係と矛盾するにいたる。」¹²⁾

この不適応のために、生産は一般に停滞状態に陥り、生産力は破壊されたり、その發展がおし止められたりする。このような矛盾は、直接働らく人民の大部分の生活難となって現われる。社会がそのうちに住む大多数の人々の生活を支持する能力を失つたことが暴露される。

例えば、徳川末期における人口増加の著しい停滞、墮胎や嬰兒殺しの一般的慣行などの現象は、封建社会がもはやその人民の生活を正常に維持していく能力を喪失し、従つてこの社会体制の存続のうちにその死滅の相が顕現してきたことを示すものである。

一つの社会体制がその存続に積極的意義失つても、なお残存し続ける場合は、その社会は全面的に反動化し、支配階級の腐敗墮落は人民の生活をいよいよ悲惨な耐えがたいものにする。それだから、このような弊害をかもしだすところの根本の矛盾——生産力に対する生産関係の不適応は、永く続きうるものではない。

自然におけると同様に、社会においても、一方に絶えず時代おくれになり、亡びつつあるものがあると同時に、他方には絶えず新たに生れて伸びつつあるものがある。新しいものは古いものと闘争しはじめ、自己の道を拓き、勝利する。新たに生れ出でつつあるものの力こそ何ものも対抗しえない力である。新たに醸酵しは

じめる生産力、来るべき社会秩序の実現をたすける新らしい世界観のごとき、どんな強力をもってしても結局抑えることのできない、新らたに生れ出でつつあるものの力である。史的唯物論は、社会におけるこのような新らしいもの、生れ出てくるものの力の必勝を、従って現在するものの永久化の否定——その必滅——を論証したものであり、史実がその正しさに証明を与えている。

生産力と生産関係との間の矛盾が激化する場合、その解決は恒に新らしく生れ、成長して行こうとするもの——社会の生産を直接担当するもの——のために発展の道をひらくことによって得られる。

「ある特定の高度に達すれば、この生産様式は、それ自身の破壊の物質的手段を生み出す。この瞬間からして、自分がこの生産様式によって縛られていると厭する諸力や情熱が、社会の胎内において蠢き出す。この生産様式は破壊されねばならぬ、また破壊されるのである。」¹³⁾

社会の生産は、既に述べたように、それ自体のうちに発展の動因を含み、恒に前進的・向上的方向をさして自己運動を続けるものであるから、その発展が一定水準に達することに、発展の社会的形態——生産関係——を更新する。経済的基礎のこの更新とともに、その土台の上にそびえ立った「法律上および政治上の上部構造」も「社会的意識形態」も必然に变革される。社会の物質的生活の生産の進歩性が、人類の将来に対して確かな、そして無限の希望を与えるのである。

三 資本主義の歴史的役割

資本制生産様式は、階級社会における生産の敵対性を未曾有の程度に拡大激化させるにいたったとはいえ、そ

の生成發展期には生産力と生産關係とのより高次の適應によつて、ブルジョアジーをして人間の活動がどれほどの事をなしとげ得るかを誇示させるほど、生産力を飛躍させた。「彼らはエジプトのピラミッドやローマの水道やゴシック式の伽藍にはるかにまさる大工事を完成し、民族移動や十字軍をしのぐ大遠征をおこなつた」¹⁴⁾

このような生産の大發展は、科学と技術を商品生産に応用した工場制度に負うものだが、工場制機械生産はそれが資本家の私的企業として、剰余価値の取得を目的として行われるという生産關係によつて、又絶えずその規模を拡大して行かねばならぬように強制される。それゆゑ、資本制生産は剰余価値の取得が可能な限り、資本家の飽くことを知らぬ貧慾とともに無限に拡大せねばならぬ構造をもっているものである。資本定在の範式（*Form*）において、その両端がともにGであることは、この運動の終結点が始発点となり、そのたび毎の結果のうちにもその端初の動機を見出すことによつて無限に循環しうるものであることを簡明に示している。なお、貨幣形態での剰余価値の取得は、富裕一般への近接をめざすものだから、それ自体としても飽満する限度はありえないのである。

かくのごとく、資本は貨幣価値のより増量の取得という到達することの不可能な目的にむかつて、自身を追い立ていくところの無限の自己運動以外に存在の方法を知らない。従つて、資本蓄積の手段として行われる資本制商品生産もまた、資本の飽くなき蓄積欲によつて絶えず、その規模を拡大し、その生産力を發展させるよう強制される。

社会的生産が資本家の私的企業として行われる結果、資本家間の關係は利得を中心とする敵対的競争關係になる。資本は存続するためだけでも、自己を拡大しなければならぬが、一資本の拡大は他の資本の滅亡を条件と

するから、資本主義社会では万人に対する万人の敵対——競争——が生存の原則となる。他の資本より多く、剰余価値を吸収しなければ、自分が倒れなければならないという恐怖と、一歩でも富裕へ近ざきたいという蓄積慾との双方からかれて、資本はまっしぐらに生産拡充の競争に飛込む。資本制生産関係のこのような特徴——自由競争——は、資本主義の発展期においては、矛盾と障礙を含みながらも、社会の生産力の発展水準に適應し、その一層の発展を促進する進歩的役割を果したのである。

自由競争で優勝するための主要な方法の一つは、商品価値を引下げて剰余価値を増加させることである。この方法による競争は、生産過程を改革することによって労働の生産性を不断に高かめることを強要する。機械や生産方法を絶えず改革することの競争、労働生産力昂揚の競争に資本家を熱中させるのは、それが製品価値の低下、労働力の価値の低下、剰余価値の増加をもたらすからであり「工場主の發明精神は賃銀引下のために休みなく働いた。」ともいえる。自由競争の原則のもとにおける資本家的生産は、商品の質を引上げ値を引下げる方法によるほか発展できなかった。そして、この二つの条件を満たす手段は、機械の發明改良による労働生産性の累進、より一層の大量生産である。このような資本家の私的利得が、社会的生産力のより高水準への発展と同調しえたという点に、資本制生産様式のもった歴史的進歩性を認めなければならない。工場制による機械生産の結果は、例えばベンの値段を次ぎのように変革してしまつた。

「すでに約十五年前に、六個の根本的に相異なる過程を二挙に遂行する自働装置が發明された。手工業は最初の鉄ペン十二ダースを一八二〇年に七ポンド四シリングで供給し、マニユファクチュアはそれを一八三〇年に八シリングで供給したが、工場はそれを今日二ペンス乃至六ペンスで卸売商に供給している」¹⁵⁾

資本制商品はこの廉価を武器として、自国内の市場はもとより、世界市場の征服に乗りだした。商品価値の低廉化には、商品の大量生産が不可分に結びつき、大量の商品に対しては絶えず拡大する販売市場が必要とされたからである。

「機械経営が一産業部門において伝来の手工業あるいはマニユファクチュアを犠牲として拡張される限りでは、その成功の確実なことは、弓矢の軍隊と戦う針銃統て武装した軍隊の成功が確実なのと同様である。」¹⁶⁾

資本は世界を自己の商品の市場として確保するために、廉価な商品とともに資本関係をも到る所に移植しなければならなかった。それで、すべての前資本主義的社会を秩序づけ維持していた多少とも自然経済的な土台と人情的關係は、貨幣経済の土台と現金關係によっておきかえられた。封建的・古代的・共同体的社会体制の身分、伝統、神話の秩序を、より、簡明で合理的な金銭計算にもとづく資本主義秩序に転化したことは、資本制商品による「文明の輸出」と称されるごとく、資本制生産の人類社会發展史上において果して進歩的役割といふべきであろう。

「ブルジョアジイは、すべての生産要具の急速な改善により、きわめて容易になった交通によって、あらゆる国民、もつとも未開の国民さえをも文明にひきいれる。彼らの安価な商品は、中国の城壁をも粉碎し、未開人もつとも頑固な排外心をも降伏させた重砲である。ブルジョアジイは、すべての国民に、滅亡したくないならば、ブルジョアの生産様式を採用するよう強制する。いわゆる文明を自国にとりいれること、すなわちブルジョアになることを強制する。一言でいえば、ブルジョアジイは自身の姿にさせて世界をつくる。」¹⁷⁾

東西から地球をめぐる伸ばされた資本の触手は、前世紀末極東の日本にいたって結び合わされた。この一環

て世界をつなぐ資本の鉄鎖はほぼ完結したが、最後に「頑固な排外心」のかぶとを脱がされた日本は、維新後十年を経ないうちに封建的肢体に「文明」の外衣をつけ、己れ自身をブルジョアジーの姿に似せたのであつた。明治の先駆的文明の輸入者福沢諭吉は、その著「学問のすすめ」(岩波文庫版・一五二頁)のうちで次ぎのようにいっている。

「我日本に於ても開国以來頗る人心の趣を變じ、政府を改革し、貴族を倒し、学校を起し、新聞局を開き、鉄道、電信。兵制、工業等、百般の事物一時に旧套を改めたるは、何れも皆数千百年以來の習慣に疑を容れ、之を變革せんことを試み功を奏したる者と云う可し。」

資本制商品の売買を始めるというだけに過ぎない「開国」が、数千年來の日本の旧弊を一朝にして一掃した。そのあとで、明治時代を風靡した立身出世主義は、「給仕から社長へ」式の出世美談を大量生産して自由競争の進歩性を実証した。

資本主義は労働の社会的生産力を、労働者のためなく資本家のために發展させたのである。そのために生産力の發展は労働者を犠牲として、一口でいえば、労働者階級側に貧困と非文明を蓄積するのが条件で、資本家階級側に巨富と文明の蓄積を可能にしたのだが、この生産関係のうちの矛盾した敵対性にも拘らず、あるいは、むしろこの敵対性のゆえに、資本主義は、自由な市場をもちえたその壮年期には、なお旺盛な活力をもつて生産様式を變革しつつ、社会的生産力發展の役割を担当しえたのである。「労働の生産力を増大させ、労働の生産力の増大によつて労働力の価値を低下させ、且つかくしてこの価値の再生産に必要な労働日部分を短縮させるためには、労働過程の技術的および社会的諸条件が、かくして生産様式そのものが、變革されねばならぬ」¹⁸⁾

資本主義のもとにおける生産力発展の動機は、資本家による労働者の不払労働の搾取であり、そのための主要な方法として労働過程を不断に機械化し、変革する。だから、機械の資本制充用は、機械そのものの機能から生ずる諸効果を、ことごとく労働者の犠牲を通じて資本家のための利得に転化させる。

「それ自体として見た機械は労働時間を短縮するが、それが資本制的に充用されると労働日を延長するのであり、それ自体としては労働を軽減するが、資本制的に充用されると労働の強度を高めるのであり、それ自体としては自然力に対する人間の勝利であるが、資本制的に充用されると人間を自然力によって隷属させるのであり、それ自体としては生産の富を増加させるが、資本制的に充用されると生産者を窮民化させる。」¹⁹⁾ このような矛盾にみちた生産様式は、また、その発展過程のうちで、この矛盾を解決するところの物質的条件——資本の集積に伴う生産の社会的性格の増進——と主体的条件——プロレタリアの団結・意識・闘争力の強化——とがともに成熟する。生産様式のうちの敵対的性格の完全な払拭、従って社会内部の階級対立の止揚が現代の課題である。

物質的財貨の生産においては、生産力の主体たる人間労働そのもののうちに、生産力を発展させる動因を含むという事情に加えて、生産は生産する人間を変革し、消費能力を新しく創り出すという事由からして、本来、生産力は向上線に沿って無限の自己運動を続ける性質のものである。²⁰⁾

このような生産力本来の性質は、生産関係の種々な態様によってその発展を助長促進されてきたのだが、生産力発展の可動性は根本的には、生産関係が、直接的生産者に生産力発展の結果得られる福利のいくばくを与えるかの程度にかかると、直接生産者が生産力発展の結果からうける福利は多ければ多いほど、その生産者を刺戟鼓舞して生産の層一層の拡充に努力させることになるが、この直接の奨励は生産者の生産を向上させることに依って、

生産者自身の労働力としての諸資質を高めめる。直接的生産者の物質生活が豊かになれば、彼らは人格として成長しうるための諸条件を自ら獲得する能力をも強化することができるようになる。生産力は生産者を向上的に変革することによってのみ、自らを發展させうるものである。——ここに生産力と生産者の相互連関・不断の發展の運動の本源が存在する——

階級社会ができてから数千年、勤務者は、奴隸、農奴として「自由」に憧れ奴隸所有者、封建地主からの自身の解放に努めてきた。勤労者のこの努力闘争の過程は勤労者の自由拡大の歴史的過程であり、それはとりもなおさず、生産力の、社会の、發展過程でもある。奴隸労働の生産力を、もう一段階飛躍させるためには労働の結果の一部分を働らくものに与えねばならなかった。労働の結果の一部を得た農奴は、同時に労働そのものの一部をも自分のものとすることができ、かくて、なかば自由な半人格となった。農奴は奴隸とは異なる、一層進んだ人間である。生産様式が人間を変えたのである。社会の生産力は、労働の主体が自由をかちとるごとに發展する。働らくものの生産力發展に規定されながら、生産関係は働らくものの自由を規定する。この史実は生産力としての勤労者が労働しつつ生産用具と自身を變革し、その水準に照応した自由を自らかちとるという人類社会の進歩の法則の確かな存在を實証するものである。

かつて封建的生產關係を、その發展に対する邪魔ものと感じた生産力は、今や資本主義的生產關係をも狭苦しいものと感じるまでに巨大な成長をとげた。資本主義的生產關係——生産手段の資本家階級による私的所有——が生産力の發展に伴う生産の社会的性格と矛盾するようになったのである。そこで、プロレタリアートにとつては資本主義的自由は、非自由——ブルジョアジ——の独裁——に逆転した。この逆転をさらに逆転させること、

ブルジョアジーに対するプロレタリアートの独裁をうちたてること、生産力を資本主義的生産関係の桎梏から解放するために要請されている。労働は本来労働すること自体のうちに、その生産性を高かめていく契機を包蔵するものだから、従って人間はその歴史を恒に進歩の方向へのみ前進させてきたものだから、現在の場合においても、生産の主要な力である人民が「生産の発展を通じて、結局は社会発展の全過程と、方向を規定する。」²¹⁾であろう。歴史の法則の必然性を認め、その指し示す方向に歩調をあわせて進むものにとつてのみ前途はひらけ、将来は明るいのである。

——一九五二・二・一四——

- (1) 長谷場文雄訳「資本論」日本評論社版・I・一八八頁
- (2) 同「資本論」I・四八二頁
- (3) 「機械の大部分は、そのものとは、極めて普通の職工が特別に簡単な一つの仕事に使はれてゐる間に、自然その仕事をするために簡易な、そしてうまい方法を見出さうとしてゐる内に得られたものなのである。……これ等の機械はかういふ人々が自分の特殊な仕事をやり易くし、且つ早く仕上げるために、自分で発明したものなのである。」（大内兵衛訳「国富論」岩波文庫版（一）三一—三二頁）
- 「今日に至るまで、我々に自然を支配する力を与へし数限りなき発明のうち、その殆どすべては、独立の労働者によつて行はれたものである。」（戸田正雄訳・マーシャル「経済学入門」四九五頁）
- (4) 同「資本論」I・四七八頁
- (5) コンスタンチノフ監修「史的唯物論」上巻一二四頁
- (6) 同「資本論」I・四八二頁
- (7) 古在由重編哲学講座第三巻「弁証法的唯物論」三三頁

- (8) 前出「史的唯物論」一五五頁
- (9) 同「資本論」Ⅱ・七五頁
- (10) 前「史的唯物論」一三九頁
- (11) マルクス「経済学批判」マルクス・エンゲルス選集・補卷3・三頁
- (12) 同資本論」Ⅰ・一六六四頁
- (13) 「共産党宣言」マルクス・エンゲルス選集第二卷下・四九三頁
- (14) 同「資本論」Ⅰ・一〇六〇頁
- (15) 同「資本論」Ⅰ・一〇四一頁
- (16) 前出「共産党宣言」四九四頁
- (17) 同「資本論」Ⅰ・七六七頁
- (18) 同「資本論」Ⅰ・一〇二二頁、前出「史的唯物論」上卷・二三三頁参照
- (19) 「芸術対象は——他のあらゆる生産物もおなじことであるが——芸術を理解できる、審美能力のあるところの公衆をつくりだす。それゆえに生産は、ただ主体にたいして対象を生産するばかりでなく、対象にたいして主体を生産する」
(マルクス「経済学批判序説」マル・エン選集・補卷3・二六七頁)
- (20) 前出「史的唯物論」下卷・一七三頁